

悉曇藏所傳の四聲について

有坂秀世

カールグレン氏に據ると、古代支那語の四聲は、現代の北音系統の諸方言では左のやうに變化してゐる (Bernhard Karlgren: Etudes sur la phonologie chinoise 581—586 頁)。

第一、北京音では

1. 陰平 古の平聲の清・次清、及び古の入聲の一部
2. 陽平 古の平聲の濁・次濁、及び古の入聲の一部
3. 上聲 古の上聲の清・次清・次濁、及び古の入聲の一部
4. 去聲 古の上聲の濁、古の去聲の全部、及び古の入聲の一部

第二、漢口音及び四川音では

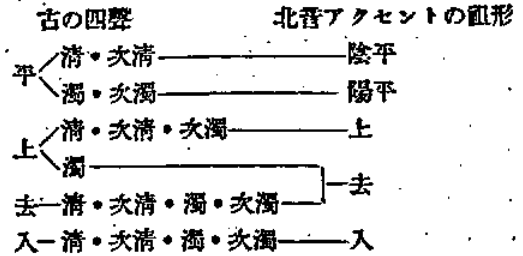
1. 陰平 古の平聲の清・次清
2. 陽平 古の平聲の濁・次濁、及び古の入聲の全部
3. 上聲 古の上聲の清・次清・次濁
4. 去聲 古の上聲の濁、及び古の去聲の全部

第三、南京音及び揚州音では

1. 陰平 古の平聲の清・次清
2. 陽平 古の平聲の濁・次濁
3. 上聲 古の上聲の清・次清・次濁
4. 去聲 古の上聲の濁、及び古の去聲の全部
5. 入聲 古の入聲の全部

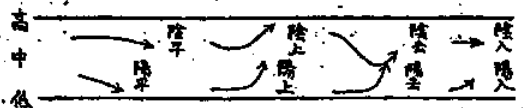
(中原音韻に於ては、古の平聲が陰平・陽平に分れ、古の上聲の濁が去聲に轉じてゐること、現代北音と變りが無い。入聲は獨立の一項としては立てられず、古の入聲字は、平聲・上聲・去聲の各項の下に分つて寄寓せしめられてゐる。但し、その分ち方が、現代の北京音の場合と大いに異なつてゐるといふ事實には注意すべきである。)

思ふに、これらの諸體系の中では、南京音及び揚州音の形が最も原形に近いものであり、その中の入聲が他の聲に轉じた結果、四川音・漢口音の形、或は北京音の形などを生ずるに至つたものと考へられる。つまり、北音系統のアクセントの祖形は、大體下のやうなものではなかつたらうか。



もつとも、現代の南京や揚州の入聲は、音尾に聲門閉鎖音を持つてゐるのであるが、北音アクセントの祖形では、入聲は未だ p, t, k 或は unvoiced medias b, d (r), g のやうな明瞭な音尾を保存してゐたかも知れない。

かやうに、現代支那諸方言のアクセントの發達を考へるについては、古代支那語に於ける頭音の清濁を考へ入れなければならないのであるが、音の高低と清濁との關係の最も歴然としてゐるのは、現代諸方言の中では吳方言である。参考のため、ここに、私が支那人から直接聽かせてもらつた一例を擧げよう。但し、残念ながら、材料はその純粹さを保證し難い。何故なら、發音者は、江蘇省の常州に六歳の時まで育つた人であるが、その家族は本來江陰の人であり、且、この人自身は、その後二十年近い今日まで、父母と共に、多くは北方で暮し、一度も郷里に歸つたことが無い。但し、その間三四年は上海に居たことがあるといふ。(常州・江陰・上海は、趙元任氏の「現代吳語的研究」に據れば、いづれも吳方言の領域に屬してゐる。)この人のアクセントは、全部で七型ある。音の高低昇降を曲線で略示すれば、大體左のやうになる。



(陽上と陽去と同形であるから、結局全部で七型となる。入聲は、音が短くて、末尾に聲門閉鎖音がついてゐる。)かくの如く、平上去入の各聲がそれぞれ陰陽に分れ、アクセント全體が綺麗に上下の二系列に分たれてゐる。これらの二系列は如何なる條件によつて分たれてゐるかといふと

1. 陰平 古の平聲の清・次清
2. 陽平 古の平聲の濁・次濁
3. 陰上 古の上聲の清・次清・次濁
4. 陽上 古の上聲の濁
5. 陰去 古の去聲の清・次清
6. 陽去 古の去聲の濁・次濁
7. 陰入 古の入聲の清・次清
8. 陽入 古の入聲の濁・次濁

殊に面白いことには、吳方言では、古の清・次清・濁・次濁の區別が、現今の音韻状態の上にそのまゝ保存されてゐる。故に、p, t, s, ts, f, m, ɿ, ɛ, 又は p', t', k', ts', co', で始る音節は必ず上系列に屬し、b, d, g, dz, jz, v, z, z, g (これらの聲門状態については趙元任氏著「現代吳語的研究」27—28 頁を参照せられたし。) で始る音節は必ず下系列に屬するのである。即ち、無聲の破裂音・摩擦音・アフリカータで始る音節は必ず高く、有聲の破裂音・摩擦音・アフリカータで始る音節は必ず低いのである。

悉曇藏卷五に曰く

我日本國元傳二音。表則平聲直低、有輕有重。上聲直昂、有輕無重。去聲稍引、無輕無重。入聲徑止、無內無外。平中怒聲、與重無別。上中重音、與去不分。

金剛聲勢低昂與表不殊。但以上聲之重稍似相合、平聲輕重始重終輕、呼之爲異。唇舌之間、亦有差舛。

承和之末正法師來。初習洛陽、中聽太原、終學長安、聲勢大奇。四聲之中各有輕重。平有輕重。輕亦輕重。輕之重者金之怒聲也。上有輕重。輕似相合金聲平輕。上輕始平終上呼之。重似金聲上重。不妄呼之。去有輕重。重長輕短。入有輕重。重低輕昂。

元慶之初曉法師來。久住長安、委授進士。亦遊南北、熟知風音。四聲皆有輕重、著力。平入輕重同正和上。上聲之輕似正和上上聲之重。上聲之重似正和上平輕之重。平輕之重者金怒聲也。但呼著力爲今別也。去之輕重似自上重。但以角引爲去聲也。音響之終、妙有輕重。直止爲輕、稍昂爲重。此中著力亦怒聲也。

なほ、同書の序の中に次の言葉がある。

我國舊來二家、或無上之輕重、或無平去之輕

重。新來二家、或上去輕重稍近、或平上平去相涉。

唐會要に據れば、天寶十四年四月、玄宗皇帝は御撰の韻英五卷を集賢院に付し、之を繕寫行用は、しめたといふ。王海引く所の集賢記注に曰く「天寶末、上以自古用韻不甚區分、陸法言切韻又未能釐革、乃改撰韻英、仍舊爲五卷。舊韻四百三十九、新加一百五十一、合五百八十、一萬九千一百七十七字、分析至細。」と。四百三十九(四百二十九の誤かといふ)韻にせよ、五百八十韻にせよ、之を切韻の百九十餘韻、廣韻の二百六韻に比する時は、驚くべき多數ではないか。そこで、王國維氏の如きは、これは普通の四聲の各を清濁によつて更に細分したために韻數がこれ程多くなつたのであらう(觀堂集林藝林八)と言つてゐるが、さもあらうと思はれる。詳しくは同氏の説を参照していただきたい。王氏も引いてゐるが、切韻序に「欲廣文路、自可清濁皆通。若賞知音、即須輕重有異。」と言つてゐるのに據ると、清濁の差異に従つて一々韻目を分つべきか、それとも清濁を併せて同一韻目の下に收むべきかについては、既に切韻編纂當時からいろいろ議論が有つたのである。此處に清濁と言ひ又輕重と言つてゐるのは、畢竟同一事を別方面から言ひ表したものに過ぎないと思はれる。悉曇藏に引く所の正法師の所傳の如き、「四聲の中に各輕重有り。平に輕重有り。輕に亦輕重あり。」といふのであるから、合計九つの型が有つたことになる。而して、この輕重とは、右に述べ來つた所から推すに、やはり清濁に伴ふ音調の差異を指して言つたものと想像されるのである。

殊に、悉曇藏で第一に引いてゐる表の四聲を、前に推定した北音アクセントの祖形と比較する時は、甚だ面白い事實が見られる。即ち、假に、輕重の別を清濁に伴ふ音調の差異と解し、怒聲を次濁音のことと考へるならば

1. 表の平聲には「輕有り重有り。北音アクセントの祖形では、平聲は陰平(清・次清)と陽平(濁・次濁)とに分れてゐた。

2. 表の上聲には「輕有りて重無し。北音アクセントの祖形では、上聲には濁音が無かつた。(何故なら、古の上聲の濁は、既に去聲に轉入してゐたから。)

3. 表の去聲には「輕無く重無し。」北音アクセントの祖形では、去聲には陰去・陽去の別が無く、清・次清・濁・次濁いづれも一型の中に含まれてゐた。
4. 表の入聲には「内無く外無し。」この内外の意味は未だよく分らないが、兎に角、北音アクセントの祖形では、入聲は唯一型のみであり、陰入・陽入の別は無かつた。
5. 表の四聲では「平の中の怒聲は重と別無し。」北音アクセントの祖形では、次濁は、平聲に於ては濁と同じ型(陽平)に屬してゐた。(これは、「上聲の場合と違ふ所である。)
6. 表の四聲では「上の中の重音は去と分れず。」北音アクセントの祖形では、古の「上聲の濁は去聲に轉入してゐた。

ここで、怒聲といふ術語について少し説明しておかなければならない。悉曇藏卷二に曰く「又以毗解六聲五九各呼亦有韻紐。共五五字有五例聲。五五一一，初二柔聲，次二怒聲，後一非柔怒聲。以前兩種字總歸第五一字。*(下略)」と。つまり、悉曇の毗解(閉鎖音)に於て、調音様式によつて分たれた五系列の中、第一系列 k, c, t, p 及び第二系列 kh, ch, th, ph は共に柔聲と呼ばれ、第三系列 g, j, d, b 及び第四系列 gh, jh, dh, bh は共に怒聲と呼ばれ、第五系列 ŋ, ŋ, ŋ, v, m は非柔怒聲と呼ばれるのである。(この事は澤蔵の悉曇三密抄には、分り易く表で示してある。)つまり、怒聲とは、本來は悉曇家で梵語の口的な有聲閉鎖音を總稱した名である。然るに、唐中葉以降の長安標準語に於ては、明泥娘疑日諸母の頭音は、特定の条件下に在る場合を除く外、一般には各 mb, nd, nj, ŋg, pʒ のやうに發音されてゐた (Karlgren: Etudes sur la phonologie chinoise 577—580 頁、羅常培氏著「唐五代西北方音」16 頁、29—30 頁、142—143 頁等参照)。従つて、日本漢音では、各、バ行・ダ行・ガ行・ザ行の音になつて居る。又、不空三藏等、當時長安地方に在住した諸家の悉曇對註の文字に於ては、梵語の g, j, d, b に對しては、各、疑日娘泥明母の漢字を充てるのが例である(安然の「悉曇藏」卷五、雜誌「藝文」第二十年第三節所載高畑彦次郎氏論文「支那語の言語學的研究(七)」等参照)。

この最後の事實から、梵語の「怒聲」と支那語の次濁音とを同一視する考が生じ、やがて、支那語の次濁音が直ちに「怒聲」と呼ばれるやうになつてゐたのではなからうか、と想像することは、必ずしも不穩當なことではなからうと思ふ。

かやうに考へて來ると、型の分れ方に於て、表の四聲は、前に推定した北音アクセントの祖形と、全くよく一致してゐるのである。而して、現代支那諸方言の中で、アクセントの型の分れ方に於て表の四聲に近い形を示してゐるものは、北音系の諸方言を措いて外には見出されない。さて、現代の北音系の諸方言は、大體に於て所謂官話の系統に屬し、もしくは、官話とごく近い親縁關係を持つ方言にして而も著しく官話の影響を蒙つてゐるものである。抑、官話は、宋金元以來、首都の所在地であつた東北地方に發達し來つた標準語であり、次第にその勢力を擴張して、つひに支那本土の北部中部西部を含む廣大な地域を被ふに至つたものである。思ふに、表の言語は、官話の先祖、もしくはそれとごく系統の近い方言ではなかつたらうか。即ち、正法師や聽法師の所傳が洛陽長安など西北支那地方のアクセントであつたのに對し、表の所傳は寧ろ東北支那の或地方のアクセントではなかつたらうか。悉曇藏の序に於て、正法師や聽法師が新來二家と呼ばれてゐるのに對し、表・金は舊來二家と呼ばれてゐる。故に、表も金も共に日本へ渡來した人であらう。而して、表や金の年代については、承和以前といふことが知られるのみであるけれど、兎に角四聲についてこれ程詳しい口傳を残してゐる位であるから、大して古い時代の人ではあり得ない。恐らくはやはり唐代の人であらう。

當時、我が留學生の主要な目的地は長安であつたし、留學僧の多くの者も亦ここに學んだのであるから、所謂「正音」として我が國に傳へられた字音が大體長安のものであつたことは事實であらう。併しながら、長安音を標準とすることについては、支那人の中でさへも異論が存した。例へば、李涪の如きは、洛陽音を天下の標準と考へてゐたのである。我が國には、隋以前に於て既にいろいろな系統の字音の傳へられてゐたことが想像されるのであるが、悉曇藏【4 頁右欄下方へ讀く】

「[10頁右欄より]」の右の記述は、隋唐以來我が國に傳へられた字音の中にも、かなりいろいろな地方から出たものの存在することを教へてくれる點で、甚だ興味を惹くものである。隋唐時代の支那の方言狀態については、雜誌方言第六卷第一節所載の拙稿「隋代の支那方言」の中に、少しく卑見を述べておいた。但し、その中で、切韻序の「江東取韻與河北復殊」を「江東に韻を取れば河北と復殊なり。」と讀んだのは誤であつて、「江東韻を取ること河北と復殊なり。」と讀むべきものであつたといふことを、ここに附言しておきたい。(了)